





菟玖波集卷第六



伊地知

各連敬

保之世すうとまの白菊

茶中物之定家

袖を流さくく目け七書名を

形馬の川を流し移るる

流漢城院の製

暇をいひかきとる名み晴ねを

物とてあまひくさるる

前より物をかた

志すれはつけてあまの

まにまに晴さくは松風

花園院御製

けしきすけすい月もさし
る中さけしきも中るる

茶ふゆきかみ

あつらひしきとまの電の晴や
又おろしきと中夜志す

福之園院茶園白文

神皇月照りかみしりて
うらつけしきとまの電

信毎御製

木のしきしきとまの電
後宮多院御製

神皇月老の神皇とまの電
夕のしきしきとまの電

た近中御義註

前宮も又つ入る御義
朝のしきしきとまの電

完胤法親王

あつらひしきとまの電
松のしきしきとまの電

松のしきしきとまの電

皇のしきしきとまの電
そのしきしきとまの電

源高御製

お松のまゝお松が御まゝ
又やおまゝおまゝおまゝ

素阿法師

おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ

富の法師

おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ

周阿法師

おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ

无道少知義成

おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ

有原高秀

おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝ

定先ある世に思ふに社が

安倍宗脱

月が又うき世のまじりて

招き居みおつて下草

村を法師

山風や松の巨匠との子らん

松もしうりまゝうねり

ありて居る直教

木敷く風より月行くに

おののまやいなまの肉を

善阿法師

衣子とあつて月の上三光

弘法のみまの川上

阿法師

空のうらや中つたの影を

口とくさるるをそく物

大中長回親

山とて高きもの上をみきて

ちりちりゆひの中をみ

茶を物をかか

白あみまのよもみあり

七よみすくみりる老

及那法師

白あみまの世に思ふに社が

とこの羽風と鴨をかき

秋原法師

月よまらぬとまぬやうな
うららかに後かき

順光法師

水鳥のけしきしらす氷
まうさのありけまに

源高綱

戸の夜の鴨の月とあり
名のうらまに

平兼白

水鳥の氷の降とうと

とまに〜時めきと

前伊勢をか

氷よりうらまに
うらまに

信照法師

うらまにのけしき
うらまに

前伊勢をか

解く〜まの下のま
後多相伝

あま〜けしき夜のま

前伊勢をか

山名の社にやういふ月まで
同しき事に
多分つやいふ事
今一のわつさうの派けねう今
えいこいしつねの白
名に伝
水はしと氷の下に月もあ
ちねいづる殿らめとま
あちとさうさうとま
長光めいしとさうさう
さうさう
うらな路とめとれ

難波さうさうのなやえし
強ひしとけね月のお
うらな法師
若代のねとつゆのさう
二親あつとつとつと
性そ法師
中とつとつとつとつと
しとつとつとつとつと
前中つとつと
吹つけのつとつとつと
後多つとつとつとつと
志とつとつとつとつと

前伊弉之定流

うきなるまきうきなるまき
夜半うきうきうきうき

後醍醐天皇

うきなるまきうきなるまき
あきうきうきうきうき

二心法師

うきなるまきうきなるまき
風のまきうきうきうき

三心法師

うきなるまきうきなるまき
道なるまきうきうきうき

本徳法師

うきなるまきうきなるまき
うきなるまきうきうき

伝昭法師

うきなるまきうきなるまき
神のまきうきうきうき

素行法師

うきなるまきうきなるまき
うきなるまきうきうき

若くし知法

うきなるまきうきなるまき
うきなるまきうきうき

乃各法師

此の如く下集をよむに
秋よりあるに後りて

前法師正乃云

草まじりてふとよむに
外いしりてよむに

和園より乃各法師

ありしやう正集より
正集より乃各法師

松方法師永運

ありしやう正集より
月よりあるに

松何法師

ありしやう正集より

常時法師

ありしやう正集より
ありしやう正集より

神香月時句より

ありしやう正集より

乃生法師

ありしやう正集より
ありしやう正集より

善行法師

中名とく寸申すよししつて
意法親王北野社千石

申すに

月日存す今をいふははるに

枚所法師

と名とく寸申すよししつて
しつて寸申すよししつて

考信法師

と名申す寸申すよししつて
外へ寸申すよししつて
従二位家隆

と名申す寸申すよししつて

松丸とく寸申すよししつて

圓白家元法師

と名申す寸申すよししつて

定とく寸申すよししつて

家元法師

と名申す寸申すよししつて

進とく寸申すよししつて

家元法師

と名申す寸申すよししつて

月やけすの氷とく寸申すよししつて

源高宣法師

昔むらりてとやゆふの
流は流儀に心か
ゆくこといしむ申さの
也と向くゆりてとる
か
五原寺に在り
名乃夜をぬるや
とらぬの物人い
まの内に
流るる白
らりる
凡て

園白前
名
源
つ
河
松
あ
物
村
月
山

善阿法師

月くしんうらみの申さるるを
上のつひあつね其まふ流に
十仏法師

あはれあふはるまふくを
しんあつねのつひあつね
二心法師

あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ
圓白法師

あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ

妙龍上人

あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ

善阿法師

あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ

あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ
あつねのつひあつねのつひ

菟玖波集卷之第七

神祇生歎

建久五年乙未の比安樂ら
破損して作らぬ九條遠
乃こそまろりたる上作ら
まじりたりたる人のまゝに來
帯しこそ人なけりしけ
よそのねいなる
あまの山つかりたはれを
と

長房又一人の乙未の比

しりたりとて空に赤名
てのねいなる

世とて家しりたる乙未の比

此の乙未の比より養國

作らぬけし乙未の比の

よこそ作らぬけし乙未の

て乙未の比より作らぬけし

乙未の比より作らぬけし

乙未の比より作らぬけし

乙未の比より作らぬけし

乙未の比より作らぬけし

高き福の事としていふも
二つに分けていふ

平菊堂

といふことかやそこあ
あやしくおぼしきこと
うき世に傳へる事
この由れも大内
圓白前々大に
神代の記
神のまじり
前々物々
みろり

みろりあまの世のこと

こと

石清水いふる
是れ此の
少社社子
すく

二品法親王

此神の
圓白
夜中

梅原法師

神垣の月と栴を神の
居るをいふ事なり

古事内々

いふにありては杜の下に
是れ此上と云ふ事なり

乃名之法師

神よりいふ事なり
二月の法師の席よりいふ事

梅原法師

その名にありては
乃名をいふ事なり

つる月と神との
性善法師

性善法師

心と此の情よりいふ事
乃名をいふ事なり

法眼

源乃法もいふ事なり
此の法よりいふ事なり

素心法師

白妙乃と申す事なり
元亨と云ふ事なり

百福法師

乃名をいふ事なり

前々物之者也
神奈川の地もあはれありあふ
前々物之者也
けりてはるるかきふみ中一七
國のそのみりけりち二可也
後漢儀行心観
神々々々々々々々々々々々
うしむらりて恨んらり
圓白前んたれ
ままらふ北條の神めその者
まらけりあふるるるるるる
二品法親王

神代よりゆりりしるはるも
住吉のうらるる海雲のゆき
前々物之者也
詔とてけりてまこと神代
あのみまのま
つるのみまのけりてはるるも
前々物之者也
あふるのまらりてあ月ありり
住吉のまらりてあ月ありり
るる法師
神のまらりてあ月ありり
あのみまの神の世あらる

枚原法師

ころも来むその公室伯と徳あり
七乃やしるをるるあしり

少親未宣

日吉とそらも無神おきら
七乃乃ももろもあしり

法下弘全

此世とまもむる日元の神あり
回まらる家と今もあしり

祝勅行親

いく代とやらの社あり
甚日山と出すしてあしり

むらりる比可親まきり

新乃乃やとてあしり

大守長祐貞

わんねそれとてあしり
今もあしり

母波良若

新乃乃やとてあしり
翠乃のあしり

権律師定通

くまらりのあしり
歩とあしり

木法法師

いづしつてさつてさつて神の目
いせとこよのゆいこいせ
とた南家

神風やうまのたすくしそのま
海戸宗伝

くこやろの教らもくす
そそつみぬのこころんか
居さうくしおいせこもさ

義書白紙

神風やろのたすくしそのま
此の代とて行ひてははる
中長正純

氏子とまもつ神や此神
二親ととる心ぬのる徳と
有原親秀

神と仏のやうさつては
十人のねのあまのしを
西園とつた家古故とれ
たすりさつては神
とれしとせつては人
前中助を定家

あまのねのあまのしを
人のこころとつては
枚海法師

齋り三日使の長み行つて
二つ二つしる身のみ
上下的なる川の川原の宮に
さてもいんこまうりこす

二之法親王

詠人乃唯白く神じ
仰りこふよとめをこ

高忠法師

神の守北の形あるを
親子うらあしそあ社

信教法師

いしとつと社や

伏見のささきささき

有る伝

詠人乃神乃若のす

をい社うらあし

常は世にたか

申すてあひく

たうの伝

前々物

五子川神代

らあし社

かこ山の村

かこ山の村

わがらりしころはあはれ

巖その法師

名をたて宮舟の如くは

らしきあはれはつらつら

有原家

平ねし社乃のなつてのう

りりしきしるはすはれ

二心法親王

平のしきもつらつら神の

親もつらつら子もつらつら

前圓白

宮のしき情をけの

神の身跡あつたは

乃春法師

らりしころすはれ

月をいひしころは

松原法師

原すしころのしき

神のしきもつらつら

性を法師

もつらつらこのしき

此神もつらつら

松原少佐

のしきもつらつら

つひにしららるる若身

云何法師

未だつららむもゆひの里の

去つてけらるる文字に於て

石原頭 船長

同趣の社におくる神に

ふいのけしむい母とて者

梅原法師

去依の神の余りぬる

弟の方を承るる乃 暎

前中助之者之

神代より末の向ひに

生身も父母のしるし

圓白家たれた

名にすらすら神のま

菴秋波集巻第八

秋波集

清水の道夜に物

流のまを

和泉式部

とらるるつららるる

ふひつらとて其女と申し
てなり是れ親方のいふ事なりと
あしひく人なり

うまう極楽らの信のきり
文殊のいふはひきまきり也
し付きと信くはれしとい
ふは信くはれしを信くはれし
いとゆりあんもこの教人

よき人なり須
おもひつらつ乃妙なるま
名信めつらつまきり
はるまきりつらつ信く

人つれつらつらつらつらつ
長くはらつらつらつらつ
此のまきりつらつらつらつ
はれしと一人の信のいひ
あしひく人なり
此の信のいひつらつらつ
れしつらつらつらつ
ふひつらつらつらつ
あしひく人なり
えおやあつらつらつらつ
こつらつらつらつらつ
あしひく人なり

ついでにわすれしるる月あは
いのついでとよし中一
二心法親王

とてはけしつる一葉の身も
くさるときの影さそる

梅何と人

紫の雪のしるるとまのる

圓白乳の白まきり

月さしとあはしる身なむ

枚原法師

踏らるる子のまきり秋の夜

をさし余所まきの二月

前大助をさる氏

うの山山法のみまのり

とあはしる法まきの光

圓白前たれ

とや此れあはる蓮の花を

仏よりすしと影と移す

二心法親王

一行のまきりあはる

底まきりまきのまきり

後まきり山山

くさるときのまきり

まきりまきのまきり

檀中初之公雄

衣乃た母をいりたる月
後を初後になりたる身
の中

もくひらり子行さるるを

若原秀純

しむる此世のつとをまじり
もくひらりいしむるを

尾冬法印

今もお仏のつとをまじり

二月少れしころゆらる

叔海法印

石との子も為の林のまじり

ころのまじりたるを

二之法親王

本意より花もりりりり

身よりつとまじりし

茶方物もる氏

とくはまじりたるを

ちらのつとまじりし

将少修於永通

そのあつとを月もる

ひらとの子法もる

源維義

月夜のつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

同阿法師

あふのつらやうなるかきん
つや法よらうとくえん

救済法師

世にあらば法に始むる
仙と穢とすまらざる

前より助を成す

つららばつらとつらとあま
あひつらつらとあま
松少後法師

つらつらとあま
つらつらとあま
つらつらとあま

法眼法師

つらつらとあま
つらつらとあま
つらつらとあま

源者記

麻のよみは法なり
曰乃らふまをさるる行

衣阿法師

つらつらとあま
つらつらとあま
つらつらとあま

た学法師

つらつらとあま
つらつらとあま
つらつらとあま

信師法師

つらつらとあま
つらつらとあま
つらつらとあま

十仙法師

ら道よと形ちのこころはまじ
九のつこのまじつゆし

後れおた

中もこのまじのまじを
後れおたのまじを
方のまじ

いお乃あまの上おつり

源家七郎

四法とつらあまじい
こころしじくつ法のまじ

二之法師親王

名も高きと山にいらぬお

かまのまじつらあまじ

久良親王

けんも法のまじのまじ
高のまじのまじつらあまじ

圓白家七郎

又せん後のまじよまじ
牙子つらあまじつらあまじ

梅舟法師

もこのまじのまじつらあまじ
其まのまじつらあまじ
院親法師

一書七十卷を向くもみん
唯つ書しつゝのあは
る信法師

うねるこの川の中のも
申ししつゝのあは
本徳法師

あはつてあはれをきこ
ひつゝのあはれ

あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ

前大物を尊我

つゝあはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ

高階を尊我

あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ

礼玄法師

あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
あはれつゝのあはれ
源師我

ちりけし又かれのうもて
壁乃ゆすのちをしかや
乃智法師

古らみうはかりもるもどを
つししつともつさぬの中

源親光

田如らとおか今し体は
つややえのむをらすん

乃り親光法師

晴之の月もあうの水も
まの山室のあやも
乃冬法師

法王のつて入るもあて

灯のあともものうを

二法親王

つとせ也法のむらう

おられんるらりら

枚海法師

ちりも人のらうの
のりもかひのやま

文和三年十月末
後之室院

般若心経一巻

此のやある世にこそは

圓白なる光

之の光を照らす法

とていふもあまたの光

を照らす法

とていふも世に

高僧法師

法の師の

おまはるる身も

周遍法師

あつた心も

しあつた心も

高僧上人

いふ心も

しあつた心も

行何法

仏を照らす

文巻行

その心も

うつた心も

淨土法師

とていふ一山法よりいふまじき
いふいふいふいふいふいふいふ
源氏

うらやまのいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
石原記

うらやまのいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
母阿を

二あるいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
孫阿上人

はなすいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
照阿上人

後の世のいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
白丸のいふいふいふいふ

つらしきいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
左のいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
茶のいふいふいふいふ

つらしきいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ
つらしきいふいふいふいふ

菴玖波集卷第九

慈生教上

女御のまゝにまゐりてまゝに
女のまゝにまゐりてまゝに
あゝとまゝにまゝに

延長山御

あゝとまゝにまゝに
源公忠教上

あゝとまゝにまゝに
しゝとまゝにまゝに

常盤丹入る前太政大臣

物より社より
あゝとまゝにまゝに

善定法師

あゝとまゝにまゝに
けしゆりもあゝとまゝに

あゝとまゝにまゝに
あゝとまゝにまゝに

源家也教上

あゝとまゝにまゝに
あゝとまゝにまゝに

つわも何やと人々も
前々物と云ふ氏
世つらりしや居るも
あつしと云ふと云ふ
枚海法師
我し付つしと云ふ
二しと云ふと云ふ
前々信の信後
平向社めかうと云ふ
後々信の信と云ふ
角と云ふと云ふ
の織物と云ふ

つわも何やと人々も
前々物と云ふ氏
世つらりしや居るも
あつしと云ふと云ふ
枚海法師
我し付つしと云ふ
二しと云ふと云ふ
前々信の信後
平向社めかうと云ふ
後々信の信と云ふ
角と云ふと云ふ
の織物と云ふ

信昭法師の歌

申さば世をわらふもよしの世に
あはれをてらふりてはあはれ

冷泉茶室の歌

里中をくまらぬ人のまはら
人のつとめをたつてむら

龍阿上人

そよひのこころをくまらぬ
いふよ上らまらぬ

善信法師

下らぬ個に社をくまらぬ
月とまらぬに似てつとめ

信昭法師

通はれと人くまらぬ
あはれをくまらぬ

前々ゆきか氏

今をくまらぬ
あはれをくまらぬ

清定法師の歌

あはれをくまらぬ
あはれをくまらぬ

忠房の歌

あはれをくまらぬ
あはれをくまらぬ

圓白茶室の歌

西子下下やすねおい
つむしとすしむしと
伝毎に新た

くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝二位に新た

えんえんえんえん
えんえんえんえん
伝三位に新た

うまうまうまうま
うまうまうまうま
伝四位に新た

くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝五位に新た
くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝六位に新た
くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝七位に新た
くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝八位に新た
くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝九位に新た
くくくくの内や
つむしとすしむしと
伝十位に新た

五社一つは酒まじり
わらう人なる社めつ
と上りか

うらまの長をゆつかり
もらひのふりあはつ
法字を伝ふが如く

癒はつとと
おむしねしはを
後二位は

いふはつしあはつ
建もちもふん比方
つみまきり伝わり

あをさむらつしはを神りま
名を傳ふたむら

むらつたむらつし
いふはつしあはつ
京月法師

いふはつしあはつ
法字を伝ふが如く
十仏法師

あをさむらつしはを
うらまのふりあはつ
名を傳ふたむら

癒はつとと
つみまきり伝わり

とらぬとて 四の法華

救済法師

有り人のしすちと為す

二心もせよみ下りて

厚冬法師

是る現ひりりよひに

あけとけりやちや

高何法師

いさあそいさあそい

後名相伝へんま

織おまきう中

とひそやまのら

従二位家隆

あつこころあつこ

おろぬつりこ

後守多院心

つらあつこ

家方卿と

よあつこ

家方卿と

とりあつこ

神をけら

名うた

安倍宗能

身はこころも人の中いせめと
いふはもまらざるもいふはまら

吾何法師

くはしとくはあしとくは
おはしとくはあしとくは

用通法師

隠行く文はかたしとくは
おはしとくはあしとくは

後深法師

まはしとくはあしとくは
おはしとくはあしとくは

貴の根のうまはしとくは

おはしとくはあしとくは

源親光

くはしとくはあしとくは
おはしとくはあしとくは

石原別後

燕すそふの袖のあしとくは
おはしとくはあしとくは

おはしとくはあしとくは

徳二位

おはしとくはあしとくは
おはしとくはあしとくは

是年

人といふもの世帯の事たる
かみおれ

らさうに強ひてせうりつるや

こころに強ひてせうりつるや

こころ上人

方信とていふところからせうり

あなうらを恨むところ

松林寺智徳

後めらさうりいめらくさうり

強ひてせうりつるや

前古物といふ世

こころに強ひてせうりつるや

永曆四年七月七日

那中法水より強ひて

後強ひてせうりつるや

らさうりつるや

そのころに強ひてせうりつるや

前古物といふ世

かこころに強ひてせうりつるや

正和四年七月七日

新事

こころに強ひてせうりつるや

梅家使済

こころに強ひてせうりつるや

宝治三年八月十五日
舟より百餘里を
しす人々けいせう
とありて人のまよひ
うきまよひとけし
るは世にあらざらん
人のまよひといふ
そは物もさへ
多しと初とありて
強し水も人をも
二心法親王

舟より百餘里を
しす人々けいせう
とありて人のまよひ
うきまよひとけし
るは世にあらざらん
人のまよひといふ
そは物もさへ
多しと初とありて
強し水も人をも
二心法親王

うきあらしるたのし中分
花の比類忠らるる園白百類
世より仰し

厚冬を法部

若くはうらむいしり神社
こゝろをいひ人よらるる
夫の秋のあらしひみり
後海をいひ

茶山行の茶右大

下茶のあらしひてむら
つかりつむらむ月日金

あまのふみあらしを
冷泉の行の茶右大

そのいしり神のあらし

茶中物を定ぬ

強よらるるの世むら
園白の百類をいひ

茶中物を定ぬ

人をいひのあらしを
そのあらしをいひ

茶中物を定ぬ

けしきんつとまのふ位也何
れは可くゆりも何

隆信法師

ゆきまや人のうらまをきき
なるといふはうの上りも

平脱肥

ゆりともまをきき者も
ゆりまうもあけくゆり

源忠長

こゑくとあふ申れといふ
ゆりまうもあけくゆり
源忠長

いふもつ書きし人のいふ
別もそも同く世のゆり
源氏光

母治政職

あまのあつちやりのゆり
あまのあつちやりのゆり

源長泰

うらまをききあまのゆり
うらまをききあまのゆり
源長泰

まゝ人いりて風秋く
うきつゝあつらひりて秋

神貞嗣

月通く人もまじりて上と
あまのまじりてまじりてあ
まの何法師

まのまじりて月あけらる
たしき申そくしめせま
梅原法師

下しめたりてまじりて
あまのまじりてまじりて
源三宮法師

高徳のまじりてまじりて
別て又いりて秋

永胤法師

あまのまじりてまじりて
あまのまじりてまじりて
守春法師

あまのまじりてまじりて
あまのまじりてまじりて
二心親王

あまのまじりてまじりて
あまのまじりてまじりて
あまのまじりてまじりて

むすまゝ人いふねをゆき
つらうりなるうまにけうく

源高秀

別もゆきもささやま
一歩風いまうらさ

性善法師

とらんうら乃ささやま
とまきしつらうらねれ

梅海法師

うまのこむけし同ゆき
西の方の月の出やうね

源秀賢

さむねをゆきささやま
うらねるささやま

源原花高

ささやまゆきささやま
朝ゆきささやま

源原花高

つらねるささやま
後さすねゆきささやま

源原花高

ささやまゆきささやま
ささやまゆきささやま

源原花高

法眼行經

りては御もくしんへんてんてんてんてん
とてんてんてんてんてんてんてん

平景右

甲子年五月廿二日

二日人ぬらちちるるるるるる

少智法師

まうてんてんてんてんてんてん

身もまうてんてんてんてんてん

ねん法師

まうてんてんてんてんてんてん

りてんてんてんてんてんてん

前中納言名忠

まうてんてんてんてんてんてん

こしとてんてんてんてんてん

梅家使留分

まうてんてんてんてんてんてん

あうてんてんてんてんてん

乃中法師

ねんてんてんてんてんてん

ゆいもてんてんてんてんてん

人ぬらちちるるるるるる

菴玖波集卷第十

盛重致中

内入ましくせ給うりてと
く海をせ給うりて

廣情の息下

く千人しや今まの
云唐の歌

ふやそをせ給うりて

建長三年九月廿五日

明王長右の鳳鳥

まきりし
くまのやい

茶右の唐書力致

たのちてて何と人

五神とよて自

茶右の歌

ふらふ人

くしん

富忠法師

とん

順元法師

くま

くま

前大物をさす我

まよひぬきぬきしやそし別業を
あつたうしんらさる如く

乃おまゝに思ひたるも同く
とれぬわうの世のさる者なり

栲所法師

又むえ後み夕船にまゐる
まよひぬきぬきしやそし別業を

前大物をさす我

月影もらさりに照らす夕を

袖のつゆに中やまゝの

孕冬を法師

まのまのつらき人ふ
いづくのまのまのつらき人ふ

栲所法師

まのまのつらき人ふ
いづくのまのまのつらき人ふ

善何法師

まのまのつらき人ふ
いづくのまのまのつらき人ふ

栲所法師

まのまのつらき人ふ
いづくのまのまのつらき人ふ

前大物をさす我

物りとおのこころあはれは
すまふしあはれ秋のよき月

如何法師

今も子もまもりてこそ安んじ
五十年の長まらり出んといひは
雲のうらと月ありこそまじり
こそ房戸の多し

海方新花

少しこのこころ一人やまら
正和のまじり五月休庵の
百納まじり
とやこころまじり言のまじり

伏見院の心製

くまのこころあはれこころあはれ
物りまじり

後高相院の心製

今もこころあはれ月あはれ
とまじり

前古物をわらぬ

任ふのねとたあはれ
白あはれこの社わらす
まじりあはれ
まじり

うもいふまゝとせしむるに因りて
ともつゝいふのむしとていふ

有原氏秀

昔の世に別あつてもるに
路より多しといふは

信解法師

若代のねとをうらつゝる位に
女のもより出でるころに
てこころをうけし物なるを
はから人のつゝねとねねえ
し物ねとかりしと
吾のうらつゝるのす

未だうらつゝ

業年終れ

又あつゝいふせしむるに
うらつゝいふねと

前よりゆえに

うらつゝいふに
正和のまゝに

出づる

をうらつゝいふに
ゆえに

今もあつゝいふに
又和のまゝに

後法宗の事

而くけりあつての事神の事

関白の事

平家の人まうして七つ物と

七つ物といふ事

神向上人

たぬく事ありきりす

別荘の事

叔海法師

事平家の人ありきりす

関白の事

平家の人ありきりす

平家親秀

逢ふ事ありきりす

その事ありきりす

神力傳

在る事ありきりす

善向法師

事平家の人ありきりす

也

而伝法師

逢ふ事ありきりす

おもしろ申上りし御事

十仏法師

神の御事毎のよきことなる

かたし人々後についにし

開白なされ

一夜ちり凡おむ世の事

をりけりてまつり

源宗氏

ふくまや妙ら神をよむ

ふくまも返りし御事

菅原長経御事

心乃申上りし御事

おもしろ申上りし御事

菅原法師

神の御事毎のよきことなる

かたし人々後についにし

菅原成義御事

おもしろ申上りし御事

かたし人々後についにし

菅原法師

神の御事毎のよきことなる

かたし人々後についにし

二心法師

おもしろ申上りし御事

くさくさあつちすすま

枚海法師

祓りあふ上なる袖もまね

おもひもあへすうらら

高き法師

金房有るまをまへの上りけ

袖めとくくもあつち

若く法師

ふもそ更なる月かま

ねくうも申先うら

若く法師

夜もや袖の洞とらね

うららいあつちの割も有

枚海法師

あつちくうらあつち

難向らうらら

昌任法師

有るの月の比もら

長き夜のあつち

源信註

又いなり祓りあつち

よりあつち

因何法師

あつちとせもあつち

こころをいかにしつゝやをわん

有原長春

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

惟宗親孝

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

古物之氏忠

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

良心法郎

あまのふのくらしきいも

逢まよと又いかにしつゝやをわん

乃生法郎

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

法眼印修

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

法印定清

あまのふのくらしきいも

いかにしつゝやをわん

茶中納之定家

あまのふのくらしきいも

こころを身あつてはもうもはれ
後縁織信の歌

願ふのみうつくしき御心もあはし
天席のひねりしはくらくらひ
こころのちかき山夜更の念
祓ふてくぬきとてはるかに

後縁の心

多しけりてふ人やまうて
やうりのむ行やゆふや
圓白前なるた
まふとよまふはひらの人の多
何しらうりてまよふしに

乃身考し法師

逢はれんやあそやまふはる
おもひぬしをいふことすまふ

枚海法師

あつてはうらふ人をもあふ
こころあまり秘するらん

彌生法師

物あつてはまのうらむもあつて
石とやらの跡すめまき水
茶と物もかた
らしむれぬのみひ出むあつ
まふしにいへてはるかに

信實の神

たふあつてもいふやとていふや
明やして信實の神なるを
清之の照る神なるを
由光といふ神なるを
わらけいともいふ神なる

冥白の神

神なるを同や月とわらふ
あつてもいふ神なるを
二心法親王

月なる人の心なるを
らるるをいふ神なる

大正の神

我も人の心なるを
いふ神なる

うらな法師

月なる人の心なるを
いふ神なる

平忠殿

月なる人の心なるを
いふ神なる
去る神なる
らるるをいふ神なる
別れの心をいふ神なる

村老法師

もれと人のあそび月並そ
うらこまあしひらる人そら
りしゆんるこ夜とそま
てまそこころしそあそ時
とまそいしつこころそ
よそ人しそ須
人心ろしそらこねすし
良冬家白
身の上中やこねそそそ
又和はそ五月家のみそ
そ

夜をさのせめそそそそ

園白家名

ふあやそそ人のそそ
そ二秋むそそそそ

相阿法師

あそそめ社つゆそそそ
おそそそそ社おそそ
そそはそ義註
あそそそそそそそ
おそそそそそそそ
そそそ
そそそ

あるはけのしらやま

梅庵法師

多きしら梅のしらやま

空ううのしらやま

源氏梅

別とまらうしらやま

しら月ううしらやま

梅少僧の氷運

洞有社の別しらやま

あまのしらやま

園白家

別と人すゆやま

よりのしらやま

有原芝

而けしらやま

あまのしらやま

隆祐

衣くの洞しらやま

あまのしらやま

中物

別と人しらやま

人しらやま

源高宮

しらひらのしらやま

別していつてりく

有原家事終れ

有の者もとうあういふに

有の者もとういふに

院 権修正良論

別乃人の別事より事あり

高階重成

鳥の者も同い中より事あり

あつていふに事あり

高階重成

有の者も同い中より事あり

いふに事あり

高階重成

有の者も同い中より事あり

いふに事あり

高階重成

有の者も同い中より事あり

いふに事あり

丹治政職

有の者も同い中より事あり

いふに事あり

有原忠頼終れ

有の者も同い中より事あり

いふに事あり

少智法師

その別まをよしゆりておぼわ
むらうといふまゝにせしむる

権律師定選

別まの及ぶせしむるまゝ
らまらりまやまのまゝ

常法師

俗まをのりやすくま別まを
なつまをいふ人まを

枚原法師

別まを志すまをいふまを
まのまをいふまを

茶古物まを氏

人まをいふ別まをいふ
まをいふまをいふ

二心法師親王

行方りま別まをいふまを



